74

朝鮮前期の疫病流行に関して

○權　卜撥・黄　尚翼

朝鮮前期の疫病は他の時代、他の地域と同じく、単なる医学的な問題ではない。これは社会と文化と自然と人口集団が互いに組み合わされて起こる悲劇の一場面である。かえって疫病は飢饉―疫病―災害の概念で理解しようとする方が良いかもしれない。

これらの前提のもとで、朝鮮前期の疫病の具体的な展開を調べてみると、時代と地域により少しずつ違う様子を発見することが出来る。一五世紀の黄海道の流行はその地域特有の風土性疾患の様相が見える。一五世紀末より一六世紀の初めまで咸鏡道と平安道地方の流行は甚だしい賦役と飢饉、寒さとが複合的に先行要因となり発生したのである。中宗一九年の平安道大流行はその代表的な例で、これは異常気象と合わせて全国的な規模の飢饉により、散発的に流行していったのである。

気象災害―飢饉―疫病の典型的なケースは明宗一年から始まった全国規模の大流行で宣祖九年にもほとんど同じ規模で全国的に流行した。これらの疫病の具体的な診断名を再構成することはこれまでの史料不足により容易なことではない。あらゆる状況と証拠を照らし合わせてみると、チブス性疾患は栄養失調、痢疾、肺炎などの疾患が複合的に作用していると推測できる。

或る程度の自然災害が起きたとしても、国家と社会がこれに対処しうる能力と資源、そして意思を持っていたとすれば飢饉と疫病の被害を最小限に押さえることが出来た。しかし一五世紀末からは統治体制の無秩序と社会的不平等の深化により下層農民らの苦痛は増し、自然災害の際、彼らを救済する制度が正常に作動できないため彼らは飢饉と疫病の最もひどい被害者にならなければならなかった。逆に飢饉と疫病が農民層の有利と社会秩序の解体を加速化させ、国家統治機構を無力にすることもあった。一六世紀初頭に始まった気候変化はこのような悪循環をなお促進させた。当時疫病の犠牲者たちはこれ

に対応する方法がそれほど多くなかった。薬剤は価格が高く貴重で、飢饉による栄養失調は国家で不定期に提供する救済や賑貸に依存しなければならなかった。ここにもあらゆる不正が介入していて、債し出し穀物はついに元穀よりも多い負担になって戻ってきた。特に地方には医術を知っている人が少なく、病になった患者は占いをするか巫俗に依るか、でなければ普通知られている単純な民間薬材に依存するほか方法がなかった。しかしこれは余裕があるときのことで、疫病が急速に熾盛する時は患者をそのそばに置いて逃走する場合もあった。このような場合、屍身は腐敗して感染の源泉になることもあった。時にはまだ発病していない保菌者が逃走して四方に伝播する媒介の手段にもなった。

（ソウル大学校医科大学医史学教室）